

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第74回

『「コロナ時代の病理学」

～ 「丁寧な大局観」 & 「厳粛な訓練」～』

2021年9月20日（敬老の日）、東京情報大学 看護学部1年生（千葉県千葉市）の『病理学』のZoom授業を依頼された。Zoomで「学生の態度、声を聞きながら、心まで診る」新しい学びの発見でもある。これこそ、「コロナ時代の病理学」ではなかろうか！病状の進行を非常に知的に、かつ冷静に受け止め、残された時間をどう使うか、家族に何を残すかということまで決めておられる患者もおられる。しかし、そう人間は単純じゃない。自分の考えを誰かに伝えたい思いがある。その思いを受け止めてくれる看護師の育成は重要である。『病理学』は、「森を見て木の皮まで見る」ことであり、マクロからミクロまでの手順を踏んだ「丁寧な大局観」を獲得する「厳粛な訓練」の場でもある。

「なすべきことをなそうとする愛」は、「高き自由の精神」を持って医療に従事する者の普遍的な真理である。新渡戸稲造（1862-1933）のいう「他人の苦痛に対する思いやり」は、医学、医療の根本である。

- (1) 医師・医療従事者は生涯の学徒である。
- (2) 何故ならば、患者は最新・最良の診療を期待しているからである。
- (3) 専門家でさえ、日々の努力を怠る時に、専門家とは言えなくなる。

教育全体への波及効果や継続性は、下記に示す「真の国際人」のあり様の提示でもある。「人を動かす底力のある真のリーダー」の人材育成は時代的要請である。

- (1) 「高い純度の専門性」と「文化的包容力」
- (2) 「自らを教材として示す風貌」と「器量と度量」
- (3) 「30年先を明日の如く」語る「胆力と先見性」

『病理学』の授業の「目的」（画像）は、「支える & 寄り添う」、「会話 & 対話」の違いの「真剣な学びの場」の提供でもある。

- (1) 「真の知識」
- (2) 「あらゆる識別力」
- (3) 「真にすぐれたものを見分ける」の実践

